

せたかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第一〇一號(一日發行)
平成十年二月一日

年表で見る

古平の歴史

《8》

■神威岬「婦女通行禁止」

長い間松前藩によつて、婦女が解かれる

子が神威岬を廻つて北に行くことが禁止されていましたが、安政二年(一八五五)にこの禁止が解かれて、これからは自由に行き来ができるようになりました。これによつて、それまで岩内や寿都辺りにとどまつていた和人が、妻を連れて続々と積丹や古平、余市方面に渡つて来たことから、古平もますますにぎわうようになりました。

記録によると、こうして古平に渡つて来た最初の女性は、現在の入船町に住んでいたという磯谷由藏の妻ハルで、江差町から來ましたが、この年だとすると年齢は二十八歳でした。

■記録に見る神威岬

この禁制が解かれた翌年の安政三年(一八五六)に古平を通つた、

探險家でもあつた有名な松浦武四郎が神威岬のことを書いています。

「陸から百間(二百メートルほど)ばかりのところにオカムイ(立岩・二〇メートルばかり)といわれる岩がある。神という意味だと言う。北オフイ(雄冬)・南モツタ(茂津多)とこの神威岬を西地の三大岬と言つてゐる。」

丙辰(安政三年二月二日)

へ口カルシ、正しくはへ口キカロウシ(現在の群来町)と

春までは、これより奥は女の通行を禁じていたが今は入れるようになり、芸者や引っ越しの者などが多く入るようになつた。これまでには「女が奥へ入ると漁業に都合がよい」と言つてゐたが、今がない」と言つてゐたが、今

年は大漁で、そんなことは全くうそであることはつきりしました。その岩の形は、僧が帽子をかぶつて立つてゐる姿によく似てゐる。」

■当時の古平を見る

「フルビラリ小さい山の崩れという意味だと言うが、そうすればこの丸山岬辺りの地名を言う

のだろうか。そのようにも思われるが、いま場所全体の名前になつてゐる。

ビクニの境からフルビラの町に入ると人家がだんだん多くなつて、山

の斜面に立ち並んでいる様子はまことに盛んである。海岸には岩がそびえ、磯は複雑だが、いたる所に小舟がつながれてゐる。

「松浦武四郎の記録にある群来町から丸山岬を見た図」

古平の浦めずらしく

さく桜かな

倉、弁天社などがあり、アイヌも最近まで五軒あつたが今はない。和人は山を切り開いて盛んに家を建てている。折れ曲がつた坂道が右手に続き、左に丸山岬が見えるが、ちょうど新緑のころで桜、桃、李の花がきれいに咲いていた。

えみし住ところなれども



吉高野タロ辛作さんとの日記から

当時の世相を見る

【2】

百号で高野名幸作さんの日記

をご紹介しましたところ、町内外の方から大変な反響がありました。たいがいの方は「今年こそ——」と意気込んではみるものの、俗にいう「三日坊主」に終わってしまって、長続きする人はいたって少ないようです。

それが六十余年も続いたとなると驚きです。

また、身辺に起きたことを多方面にわたって的確に、簡潔に書き残しておりますので、何よりも信頼できる資料としても価値があります。

幸いご家族からも、「役に立つものでしたらどうぞご利用ください」とのことでしたので、時代を追ってご紹介をしていきたいと考えております。

宮神社に参詣する

1/2 初売り、今年から呉服屋が「朝くじ」をなくしたの

で余り早くから客が来ない
○貫^レ一〇〇貫、浜はカレー漁で賑っている、東京など送り先では安値とのこと

3/15 物産商組合では月一回の休みを与えることにする、

今月は二十一日（日）である

3/21 物産商組合連合慰労会初回、鮫漁のためか集まりが

少なく四十名位、すしが出る、

局長、校長、その他の挨拶あり

この日五千石、合計二万石

4/7 火災予防組合で煙筒などを一戸ずつ見て歩く、町長ほか役員十余名

4/9 鮫大々漁、この日一万石、合計五万石、困の群来場

1/1 新年交礼会が小学校であり七十余名出席、のち西の

所も大漁、刺網保津で一杯くれるから汲みに来いとの話し、刺

網もケラ掛り、浜一帯は大きさわぎ、人手がない

4/20 鮫漁合計七万石余、

平年の二倍、株式下落、諸物価も下落しているので製品も安い

5/19 このところ雨が続いている。柏干しができず、一日千円ぐらいの損害とか、ウジがわいて投げたものもある

1/12 カレー網大漁、一〇〇貫^レ一〇〇貫、浜はカレー漁で賑っている、東京など送り先では安値とのこと

3/15 物産商組合では月一回の休みを与えることにする、

今月は二十一日（日）である

3/21 物産商組合連合慰労会初回、鮫漁のためか集まりが

少なく四十名位、すしが出る、

局長、校長、その他の挨拶あり

この日五千石、合計二万石

4/7 火災予防組合で煙筒などを一戸ずつ見て歩く、町長ほか役員十余名

4/9 鮫大々漁、この日一万石、合計五万石、困の群来場

1/1 新年交礼会が小学校であり七十余名出席、のち西の

宗僧侶三名の講話あり、参詣人が多数あった

7/29 警察と役場が主催し

て蠅とり宣伝のため町を歩く、馬車二十余台に六年以上の児童

を乗せ、提灯をつけて歌をうたうながら歩く、自転車も二十余台続く

7/30 土用うしの日、浜では大勢が泳いでいる、賑やかである

6/14 青年団運動会、自転車競走会の寄付集めに来る、十円寄付する

6/18 朝、イワシが浜に上がりつたというので町中が大きわがつた

6/20 ①干場で青年団運動会では試験畠をやっている

6/22 沖村までマラソン、盛大で自転車競走に人気がある

6/22 三山神社の祭礼、行列が町を通る、夜は提灯をつけ

坂を登り参詣する、角力大会が

9/17 競馬会がある（二日目）大勢集まつたそうだが馬が

不足とのこと

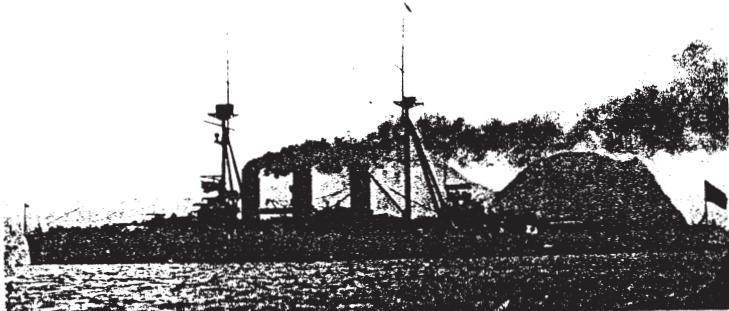
9/20 恵比須神社祭、花相撲がありなかなか面白い

9/29 国勢調査のため午前

六時より受持区域を廻る、午後六時までかかる、10／2終わる
10／21 古平港に軍艦鞍馬が入港、町中が大賑いである、十時古平沖に投錨、浜は黒山の人ばかりである、町内で五千人、それに美國、積丹からも見物に来る、巡洋戦艦一万四千六百トン、明治四十年完成、二万一千五百馬力

10／23 大謀綱（本 共同）
10／24 ブリ一千尾取れる、古平丸で小樽へリンク送る
10／27 朝早くから花火が上がる、在郷軍人会の射撃大会と觀楓会あり、七、八十人が行く八時頃、廻り淵まで行く
10／27 新地山の上の土地を測量したところ、美國新道工事のため百坪のところから六十坪もどられている

10／30 表彰式、尊老人会、道路工事表彰者 山口金治
教育者三十年勤続者一戸 範一時から小学校
琴、三味線、浪花節、琵琶、支六十八人が出席、余興に尺八、支
府長、小樽税務署長も出席



11／1 明治神宮鎮座祭、小学校で遙拝式
11／9 サバ大漁、一樽一円
三樽買う
11／16 鉄道線路踏査隊として然別行き、晴、三十二名、六時役場前出発、二里奥の滝で記念写真、九時半稻倉石着、これ（丸山沖に停泊中の鞍馬）

(別行動で余市のリンゴ園を見
から山道を登る、二時然別鉱山に着く、然別駅より余市へ、又旅館に泊る。

――昔からよく聞か
る　と　わ

五

はじめは神妙に聞いていた人たちも、さすがにぐつたり？してきたようだ。向かいの席を見ると、こちらはもうすっかりあきらめ顔である。やがて、「……至つてソジ？ 簡单ですが、以上でお祝いの言葉といたします。」

やれやれこれで終わつたか、なんとなく疲れたという元気のない拍手、よく出会う結婚式などの祝辞のシーンである。

『下手の長談義』

◆ ◆ ◆

年の暮れに、ずいぶんたまつている家に集金に行つた。

さんざん言い訳の後に、

「オレだつて炒つた豆でねえんだから、そのうちに必ず芽も出るサ。そうなつたら必ず全部払

12 / 24 カレイ大漁一なぎで五百貫取つたところもある、二百円ぐらいになる

移り変る浜辺の風景

渡辺 ハツエ

いております。私の亡夫の葬儀に際しましてもご厚情を頂きました。思えば、昔は道路をはさんで家の前は海辺で、天然の海水浴場といつてもよいきれいな海でした。子どもたちは日没も気にせず元気に泳いでいたものでした。ツブを探り、カニを捕まえ、雑魚を釣つてと恵まれた自然環境で育ちました。浜辺もすます。すると母は、

歳をとることに、月日の経つのが早く感じられるようになりました。時は一刻も私の歩調には合わせてくれません。何はどうもあれ今年も親戚や知人の皆様から賀状を頂くことのできた幸をうれしく思つております。

皆様にも新しい年が幸多き良い年でありますように祈念申し上げます。

私も自分の健康は自分で守り、来年も元気でかくありたいものと念じております。

ちなみに今年の賀状は、差し出しあり受け取りも私の名前であつたということに、一抹の寂しさは隠し切れませんでした。

顧みると、まだ前浜が護岸されていない当時、若い夫婦が葉浜辺の丘にテントを張つてキャンプをしておりました。私は古平祭りの日に赤飯を作りましたので、テントにいる奥さんに差

し上げました。すると奥さんは「主人はお赤飯が大好物なのです。昔ながらの甘味の入らないお赤飯は何よりのご馳走です」と言つて、大変喜んでくださいました。その時、ご主人は磯で魚釣りを楽しんでおりました

が、のどかな風景でした。ほんの数日間のつかの間のおつき合いでしたが、それ以来、毎年変わることなく温情ある賀状を頂

「茎を見て、丸くころころして汗をふきながら草取りをしたおかげで、秋になるとふさふさおかけで、秋になるとふさふさ」と教えてくれました。

稻黍餅

と栗餅

竹内コト

春のにしん場の仕事が一段落すると、そろそろ畑仕事にとりかかります。戦時中や戦後の食糧難でなかつた時代でも、たいていの家ではお米の足しにと、また、おやつ代わりにもなるイ

モやカボチャ、それに野菜類などをいろいろとつくつていまし

た。特に山畑には、雑穀のイナキビ（稻黍）やアワ（粟）など穂のところだけ抜き取つて家に持ち帰ります。

それをむしろの上に広げてよく乾燥させてから、ていねいに餅つきのうすでついて、きれいに殻を取つてしまふのです。こ

うしてすっかり精白したものを持袋に入れてとつておきます。こ

つかり護岸されてしまつてからは、浜辺で、無心に釣り糸を垂れていた人たちの楽しそうな姿はもう遠い過去のものとなつてしまい、今まで當時を知る人たちの語り草となつてしまつた。

遙かなる故郷の思い出

痛恨！

戦友松岡外与造さんの戦死

⑤

橋

義我 春

[41]

岩崎さんが、松岡家へ私から聞いた通り手紙に書いて出してくれることになり、心の重荷が少しとれたような気がした。

それからしばらくして、岩崎さんが再度私を訪ねて來た。それは、突然の訃報で松岡さんの家族にとつては大きなショックだつたらしい——ということだつた。

外与造さんの一番上の兄さんは胸を患っていたらしく、やつと布団の上に起きられるようになっていたところに、外与造さんが戦死と聞いたとたんにガックリときて、またまた寝込んでしまったという。

私の伝言として、札幌へ来たらぜひ寄つて、外与造さんの軍隊での話とか戦死のときの状況をお話しください、ということがあつた。私もぜひ寄つて、

外与造さんへ手向けの線香でも思つていたが、その機会もないまま、古平の大戦の年に東京へ出て今日に至つている。

あれから五十年の歳月が流れ、平成七年八月十九日、樺太

国境戦戦没者五十周年慰靈祭が

戦友会の主催で、遺族会も参加し札幌中島公園の護国神社で行われた。北海道全土から戦友や

遺族の方が集まり、さすがの広い境内もいっぱいであつた。

私も戦友会の役員からのお誘

いで東京から出て来て参加したが、ラッパを持参して来てほしいとの要請があり、亡き戦友の慰靈のためとお受け受けた。

祭典のプログラムに「ラッパ演奏」があり、戦友の靈安かれと祈りをこめて老兵の私がラッパの献奏をした。莊厳で哀愁のあとであつた。私もぜひ寄つて、

が境内に流れるとき、遺族会の席から嗚咽がもれた。五十年ぶりのラッパの音色に、亡きご主人や肉親をしおび、故人と遺族の心の交流から感無量となつたのではないだろうか。

私としてもこの慰靈祭に出席のため、はるばる東京から出てきて戦没した戦友の供養ができことと、長い間気になつていた松岡外与造さんの靈をお慰めできたことに満足して、東京に帰ることができた。

◇ ◇ ◇
今なお極寒のサハリンの永久凍土の下に、野ざらしのまま七百名の戦友が寂しく眠り、一方は平和というぬるま湯にどっぷりとつかり、家族に囲まれて繁栄の日本に生き長らえている。

運命とはいながら、同じ戦場で共に銃をとり、祖国のために命をかけて散華していく戦友と、こんなにも差があつていいものだろうか……。

戦争は一度としてはならない、させてはならない、と今日も念じながら——。

(終わり)

(前ページより続く)
れをお正月の餅をつくときにもち米の上にのせて蒸し、もち米に混ぜてお餅にするのです。

もち米は値段の高いものでしたから、当時はこうしてお餅をつくことが多かつたようです。

しかし、粟餅やきび餅にはまた別なおいしさもあつて、もち米のお餅よりも好きだと言う人もおります。この頃はまた、きれいな黄色の粟餅をまた食べてみたいと思つております。

ほかにもイナキビを混ぜた赤飯やおはぎがありました。おひな様や春の彼岸も近づいてきましたので、いろいろと思い出して書いてみました。





齊藤波留

雪しまくこが難所といふ峠

大和田 絵伊

鮭漁や浜の句碑にもある魚臭

氷上に公魚釣りの小屋の建つ
なや掛けのすけそ寒干始まれり

越野スミ子
れり

水見句丈

潮荒れの後の鮭に望みかけ

群來村の旧道乞う桐の花

長谷川和子

仲谷比呂子

常連の句はなしつきぬ桜もぢ

そよと吹く風の良夜となりにけり

けり
起
黒
雅
子

仲谷安代

備えなき大東京に雪降れり

蝦夷富士の裾野の広し馬鈴薯の秋

西島さつ子

大島喜惠

蝦夷富士の裾野の広し馬鎧薯の秋
清明の夜明けの潮に鯫群來 福

福津誠悅

藻布団に木の実紛るる河口かな

はまなすや石狩川の渡船あと

あと

吉平ホトトギス会

越野敏雄

次号になりますがご了承ください。

Digitized by srujanika@gmail.com

岬短歌会詠草

味の良き茨城のほしいも歌会の席に持ち来ぬ配らむと思ふ
 うつすらと積みし雪搔く元旦に新聞少年と祝言交す
 年ゆくに悲しきことも忘れむとをさなきに覚えし「お月さま」うたふ
 榊
 新年の寿生けし水盤に朱きつぶら実一つこぼれゐて
 田中香苗
 老いの身の細胞今も消えゆくと思へば淋し夜半を目覚めて
 池田テル
 音のみにて動かざるわが除雪機に隣から向かひから人來てくるる
 東
 年移る鐘の音ききつつ病む部屋に孫らへの年玉数々作る
 鈴木時子
 雲暈る気の晴れぬ日の部屋に咲くいいただきしシクラメンの花の明るさ
 丹後初江
 登校の孫は靴あとくつきりと残して行けり初雪の朝
 菅原節子
 しみじみと初春の日を感じつつ昨日とちがふ静けにをり
 金杉すみ
 雪降りの止みし東の間豊浜の水平線に夕明かり見ゆ
 長崎フユ
 待望のスケソ三千箱獲れしとふ語るも応ふも声彈ませて
 山口スエ
 訪ねると「まつや」の母さんアトリエにて香焚きうれしそなり和服着て立つ
 堀昭典子
 堀典子
 竹内コト



- ・ばんいた॥裁縫の裁ち板（低い足の付いた
厚い木の板）
- ・はんかくさい॥常識がない、普通でない
・ばんきり॥いつも、終始
- 「ばんきり 酒ばかり飲んでる！」
- ・ばんげ॥晩、夜 ばんげまま॥夕食
・うはんで॥うだから……
- 「ンだはんで」॥そうだから……
- ・ひざかぶ॥ひざ頭
・びつぴ॥ホイツスル、うるさいくらいよく
しゃべる人のこと
- ・ぶつたまげる॥びつくりする、大変驚く
・ぶなぐ॥殴る
- ・ふるしき॥（ふろしき）ほら吹き、自慢話
ばかりするような人
- ・ふんじやま॥なりふりかまわない、無作法
な態度（の人）
- 「あの ふんじやま なんだ！」
- ・べ、ベエ॥相手に同意させる
・ふんづける॥踏みつける
- 「（どこそこへ）行くべえ」
- 「（なになにを）やるべえ」
- ・ベゴ॥牛、漁夫のないしょの魚（ほまち）
・へずねえ॥つらい、せつない
- ・へそまがり॥つむじ曲がり、ひねくれ者、
へんくつ、強情っぱり
- ・へちゃむぐれ॥すぐふくれる、ふてくさる
・へつちやら॥平気、気にしない
- ・ベつちよかく॥べそをかく、泣きべそ、
泣きみそ
- ・へま॥失敗、まぬけ
- ・へら॥妻が年上の夫婦
・へらかれエ、へらからい॥えぐい、大変な
目（にあう）、塩辛い、
- ・べらぼう॥とんでもない、でたらめ
・へらまい॥（食べ物が）足りなくなる
・へれけれ॥（中へ）入れてくれ
- ・ふねをはぐ॥船を建造する はぐ（継ぎ合
わせる）
・ふんずらつけねえ॥厚かましい、図々しい

古 平 の 方 言

(12)

- ・ぶつたまげる॥びつくりする、大変驚く
・ぶなぐ॥殴る
- ・ふるしき॥（ふろしき）ほら吹き、自慢話
ばかりするような人
- ・ふんじやま॥なりふりかまわない、無作法
な態度（の人）
- 「あの ふんじやま なんだ！」
- ・べ、ベエ॥相手に同意させる
・ふんづける॥踏みつける
- 「（どこそこへ）行くべえ」
- 「（なになにを）やるべえ」
- ・ベゴ॥牛、漁夫のないしょの魚（ほまち）
・へずねえ॥つらい、せつない
- ・へそまがり॥つむじ曲がり、ひねくれ者、
へんくつ、強情っぱり
- ・へちゃむぐれ॥すぐふくれる、ふてくさる
・へつちやら॥平気、気にしない
- ・ベつちよかく॥べそをかく、泣きべそ、
泣きみそ
- ・へま॥失敗、まぬけ
- ・へら॥妻が年上の夫婦
・へらかれエ、へらからい॥えぐい、大変な
目（にあう）、塩辛い、
- ・べらぼう॥とんでもない、でたらめ
・へらまい॥（食べ物が）足りなくなる
・へれけれ॥（中へ）入れてくれ

▼仕事が夜に持ち込まれること
が多くなって、『せたかむい』
の発行がすっかり遅れてしまい
ました。愛読されている方々か
らは「今月号はまだ?」とか、
「百号で止めてしまつたんです
か」というご質問をいただいて
申し訳ございません。せつかく
原稿をくださった方にはお詫び
いたします。

どうやらひと息つきましたの
で、春めいた陽気に乗つて挽回
に努力します。

▼百号は、手が廻らず計画倒れ
になつてしましましたが、いつ
になく、ご覧になつた方からう
れしい反応がありました。
▼高野名幸作さんの日記にはみ
なさん驚かれたようです。
吉川さんの一大叙事詩は圧巻と
のことばが聞かれました。

▼第二号から書き続けて福井さ
んが百回を数えましたが、ただ
今人間ドックで検査中です。元
氣を回復して、また健筆を振る
つてくださることを期待してお
ります。